

て適宜改革すべきことが命ぜられた。翌明治三年九月藩政改革令が公布せられ、藩高十分の一を陸海軍費にあて、さらに、その残高を藩庁の諸経費および藩士の家禄にあてるべきことが定められた。この二度の布告によつて、各藩の士、卒族は家禄に大削減をうけ、その生活は急速に窮迫していった。明治九年八月政府は華族士族の禄制（家禄賞典禄）を廃止し、従来の禄に代えて、その数力年分に当る金額を公債証書で下附することとした。この金禄公債証書は明治十一年七月から発行を開始し、大体、

# 士族の商法

宍粟郷土全報

その年内に全部の交付を終わつた。この結果、多数の士族は、この金禄公債に自己の将来を託さねばならぬこととなり、種々の方面に就産の途を求めることがとなつた。明治十一年に兵庫県の士族に交付された金禄公債証書は五分利付公債九、二九〇円、六分利付公債五一萬六、一三〇円、七分利付公債三二一万二、五六〇円、合計三七三万七、九八〇円で、明治十一年一月調による有禄者は六、八九五人であつたから、その一人当たり平均交付額は五四二円余になる。

明治十二年六月、兵庫県は政府の士族保護の積極の方針をうけて県属本山彦一（のち大阪毎日新聞社長）と倉本雄三に県下各地の士族の状況を調査させた。その復命報告書によると、次のようである。

明治十二年六月、兵庫県は政府の士族保護の積極の方針をうけて県属本山彦一（のち大阪毎日新聞社長）と倉本雄三に県下各地の士族の状況を調査させた。その復命報告書によると、次のようである。

目 次	
士族の商法	黒田 義隆
大江山の酒呑童子	中村 潔
倉敷方面見学旅行記	
供出梵鐘の銘(二)	
郷土だより	
会員名簿(2)	

士族の中には、目的を立ててその業に着手するものもあるが、一方には、まだ、その法を確定するまでにはならず、ただ公債の利子に頼つてわずかに生活しているものが最も多い。

としている。復命書は姫路（一、二〇三人）・竜野（四五三人）・篠山（六六八人）・尼ヶ崎（六八一人）・三田（二五二人）・柏原（二一〇人）・出石（六〇八人）・赤穂（二七六人）・三日月（二七一人）・福本（一〇一人）・林田（一一三人）・山崎（一八七人）・安

志（一三一人）・奥浜（五六人）・小野（一二〇人）・  
三草（六六人）・洲本（一二〇四人）について各地藩士  
の状況を報告している。このうち、山崎士族については

(註1) 山崎士族総数百八十七人の中、有祿者は百七十人である。この地は旧藩時代には半知の制であつたから、中等士族に至つては藩制改革の後もその名は減じたが、その実はかえつて増加したものもあり、したがつて一般士族の生計は甚だしく貧困ではないが、安志、林田にくらべれば、土地がやや繁栄しており、加えるに廢藩後は華奢の風がしだいに行なわれ、これがために貧困に陥るものが少くない。そして、当地は播州中最も山間僻遠の地で、さらに産業の起こすべきものがないから士族においても就産事業の目的を立てる見えない状況である。ただ、養蚕のごときは、この地

当てて貸付けることにした。その内訳は、  
兵庫県士族就産事業一覽表（明治十八年）

播磨				摂津				國
神東	加東	明石	飾東	有馬	川辺		郡	
福	三	小	明	姫	三	尼	旧藩	
本	草	野	石	略	田	崎		
織物場	経纶社	織物場	共就社	永世社	就光社	織物稽古場	慈恵社	
織物	織物	織物	織物	陶器	燒寸	織物	燒寸	
三〇〇	三五〇	四五五	一七〇〇	六〇〇〇	一〇〇〇	三七三三	一〇〇〇	
二七九〇〇	二五〇〇〇	一四六六五	一〇六三〇	五〇〇〇〇	五〇〇〇〇	五〇〇〇〇	一六六〇〇	
			一	一			一七〇〇〇円	

としている。

翌十三年政府から授産金六万円の許可があつたので、兵庫県は県下各地方で最も適當と認める士族の事業に割当てて貸付けることにした。その内訳は、

に最も適する事業であろう。

合計	淡路		丹波		但馬		播磨		國		
	津名	多紀	水上	城崎	出石	穴栗	佐用	赤穂	揖西	揖東	郡
二〇	徳島	篠山	柏原	豊岡	出石	安志	山崎	赤穂	丸野	北龍野	林田
二五	就農社	興農社	紡績物	長尺社	興産會社	豊盛社	盈進社	大織物	広業社	如立社	立礎社
五	茶園	開墾	織物	紡績物	織物	養蚕	陶器	織物	織物	織物	種事業
四二〇〇	一五六〇	二九五九八	二〇〇〇	一〇〇〇	九三〇	六三〇	二〇〇〇	八三〇	七〇〇	一〇〇〇	資金貸下高
二六五二	一三九六八	二四二	一八八〇	一三二五〇	一五〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	六七二	七五	三五〇〇〇〇	一七一六八五六八
〇			〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	醸金並株金高

これによると、起業基金六万円のうち、県営授産のための支出金は一一、五〇一円三〇銭で士族に対する直接交付金は二九、五九八円で計四一、〇九九円三〇銭が六万円中から支出されたこととなり、(六割八分五厘)一

戸あたり交付額は三円である。かくて起業基金を交付された士族たちは明治十三年六月から同十五年五月までに各地で産業結社を起した。西播地方では次の各社であった。

結社名	旧藩名	創業年月
立礎社	林田	明治一三、七
拡業社	山崎	一三、一〇
大成社	赤穂	木綿織
如結社	明治一三、八	一〇〇〇円
織物	木綿織	一〇〇人
	一五〇二	一〇三
	二三〇五	二八三
	一五〇〇	六八
資本金		社員数

これらの事業所(明石の共就社、赤穂の如結社、林田の立礎社、山崎の大成社、安志と小野の織物場、三草の経綸社等)は、創立以来、双子および巡査や看手の服地とか手織縞の類を製造し、明治十五年から神戸港で販売人を置き、抵当を取つて製品を委託販売していた。(明治十六年九月兵庫県より農商務省への報告)

ところが、その後世間の不景気と物価の下落によつて、

鉢酒  
山陽盃

山崎町  
字2-0063



いすれも非常な困難に陥り、そくそく倒産または休業のものがでてきた。県は再び資金を貸付けて再興の見込みのあるものに対してもう一度保護を加えようとしたが、明治十八年一月、政府から授産金一四、〇一七円の貸下げを許可された。

さて、明治十七年末の授産事業の状況は尼崎慈恵社、明石共就社、姫路織物稽古場、林田、赤穂、三日月、出石、洲本織物所の八カ所だけとなり、山崎大成社の名が見えない。翌十八年には六カ所、十九年には尼崎慈恵社、林田立磯社、姫路永世社、豊岡豊盛社の四カ所だけとなり、マツチ、陶器、綿布、養蚕関係の各一社づつが残つたわけである。慈恵社は明治二十二年收支償わず休業、註2 立磯社は二十年、二十一年と欠損つづきのため、二十二年休業した。兵庫県が管内の各地に、資金を貸付けて保護した士族の事業は二十三社あつたが、ほとんど全部が目的を達成できずに数年間で消滅した。士族授産

# 洋酒・銘酒なら 八百福商店

山崎町山田  
(国道筋)  
電二一〇四一三



食料品一  
切

社は結局全部失敗に終つた。ただ少数の士族の生活を数年支えただけであり、中にはかえつて産を失つて、悲惨な状態となつたものもあるらしい。その失敗の主な原因は工業を授産業として選択したことにあるといわれている。

昆虫学者松村松年は明石出身であるが、その自伝の中で、父舒平が士族の織物会社の社長となつたが失敗したことについて述べている。共就社のことであろう。

明治十二年に本山彦一は、山崎は播州中最も山間僻遠の地で、さらに産業の起こすべきものがない、といった。しかし、九十一年後の今日はそうではない。郡南八カ町村が合併し、工業生産額（五三パーセント）を主位とするとともに、町の総面積一八、〇〇〇ヘクタールの約八〇パーセントを占める一四、三〇〇ヘクタールの林業面積の内訳は町有林七七〇ヘクタール、私有林一二、〇〇〇ヘクタール、社寺有林九三ヘクタール、国有林一、四六七ヘクタールで、二一パーセントの生産額をあげて、管内の七森林組合には二、三五〇名の組合員を擁し、総人口の四〇パーセント以上が山林労務者として活動している。木材業組合もある。製糸工場とともに製紙工場がある。そして指導機関として山崎営林署、県林業試験場がある。さらに高速広幅員の中国縦貫自動車道は、山崎をへて東は福崎、滝野、三田、川西方面へ、西は佐用を

へて岡山県へと延びることになつていて、完成の上は、さらにめざましい発展が約束されている。

註1 「各藩維新前士卒禄調」（總理府統計局図書館蔵）には、旧山崎藩、士一二七、卒一六二、計二八九、石高渡、四、二九一石六三とあるが、二八九人のなかには臨時傭的卒族を含んでいるのであろう。

註2 指保郡林田町の建部神社（藩祖をまつる）拝殿に立派な立礎社の額が奉納されており、社前の西階下に「旧林田藩卒榮績社中」奉獻の立派な石燈籠一対がある。

本稿には『士族授産史』（我妻東策）、『禄制廃止後における兵庫県士族の就産状況』（吉川秀造）、『経済史研究』昭和十一、第十五巻二号、第二十二巻一号）、「明治初年県下における士族就産事業」（太田陸郎）等を参考とした。

# 大江山の酒呑童子

安志中村 累

安富町の氏神「加茂神社」の絵馬堂の西北隅に、随分古ぼけて、今ではよくよく気をつけて見ないと何の絵かさえ判じかねる絵額が奉納されて居ります。

山伏姿の五人の武者が、山深い渓谷のほとりで、折か

ら洗濯中の美少女に、鬼の住む大江山への道を尋ねている図です。

自分の幼時には、一今からもう既に半生紀の前のことですから、この絵も、もつとずっとハツキリしていまして色目も美しく、いつも祖母や両親に連れられて参拝する毎に、この「大江山の頼光鬼退治」の話をよく聞いたものです。

一、昔丹波の大江山、鬼ども多くこもりいて、都に出ては人を喰い、金や宝を盗み行く。☆

二、源氏の大将頼光は、時の帝のみことのり、お受け申して鬼退治、勢よくぞ出かけたり。☆

三、家来は名高き四天王、山伏姿に見をやつし、けわしき山や深き谷、道なき道を切りひらく 以下略

☆

この「頼光鬼征伐」の歌と共に、明治から大正の初期

# 修政会

郷土をより豊かにより住みよ  
ものにする同志の政治団体

代表幹事 小川 登

山崎町東鹿沢33  
修政会館  
TEL 2-0466

時代迄、よく人口に喰炎され喧伝された物語りであります。自分は老後の閑暇に、このなつかしい昔語りが、我が兵庫県から近い地のことでもあり、果してどこ迄史実であり、どこ迄がその真相であるかを探りたい気持で、その調査と実地見聞に取り組んで見ました。以下拙稿を御笑覧願えますれば、何より幸甚に存じます次第です。

### ☆ 源 賴 光

多田源氏の開祖、源満仲の子が頼光であります。摂津池田の西、川西市から能勢の妙見行きの電車に乗り、多田で降りますと、すぐ近い猪名川畔に、この源氏の開祖を祀る「多田神社」があります。

つまりこの多田の地が「源氏発祥の地」でもあるのです。頼光はこの鬼退治に先立つて、京の都から藤原保昌を先導として、この多田の地に、父満仲を訪ね、暇乞いをしています。尚、頼光自身も京の都の守護から但馬の守、肥後の守を経て、摂津の守にも任せられ、後にはこの多田の地に在任しています。

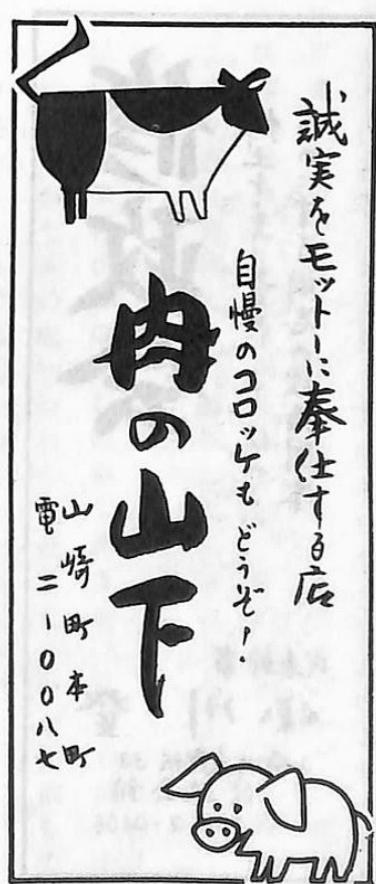
私は若い頃、今、ナイキ基地建設でやかましい「能勢町」に在転して居まして、往還にはいつもこの能勢電車の御厄介になり、多田を通っていました。この能勢町の旧家で、「能多」さんと云う方が当時の村長さんで、よくお世話になりましたが、この方の「能多」と云う姓が

能勢妙見さんを創祀した能勢家の「能」(◎)と多田源氏の「多」をもつてつけた苗字である古い家柄であることをよく土地の人から聞かされていました。

### ☆ 鬼 退 治

頼光の鬼退治行は、正暦元年三月（九九〇年）といわれ、又別の説では寛仁元年三月（一〇一七年）と伝えられます。いづれが正しいかはつきり擱めないが、天の橋立にある成相山に保存する勅文は寛仁元年と誌るしている。「時の帝」は第六十六代一条天皇であります。

前述の頼光に、鬼の住む岩屋を教えた洗濯の少女は、十三才の時、鬼どもに京の都から奪われて来た池田中納言国隆（堀川黄門）の一人娘と伝えられ、尚又酒呑童子の一味が京の都で捕えた婦人の中で、随一の美女は、伊予権経友の弟経成の娘で、この鬼征伐のすんだ後、大江山麓の現在の「雲原」の里に住みつき「柳鬼童」を生んだ。この柳鬼童は筋骨たくましく成長し、後、都に出でて、頼光を討たんとつけねらっていたが、果し得ず捕え



られたと伝えている。頼光の従者としてこの征伐の行を共にした家来の四天王は、有名な渡辺の綱、坂田の金時、それとト部季武、碓井貞光の四人であった。

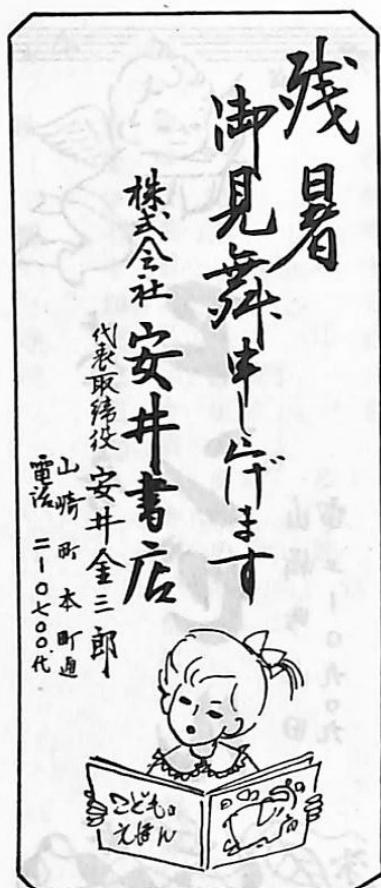
☆ 大江山の所在

現在の山陰線の福知山で河守線に乗り換える、河守迄行つたら、ここが今「大江町」であり、ここから幾多の名勝古蹟をたどって行くと、西北に千丈ヶ岳(大江山)が手に取るよう展望できる。然し山一つ北に隔てた加悦町は、もうここは丹波でなく丹後であります。

大江山は、その豊富な伝説、史跡、考古学の上から絶好の観光地であり、風景絶佳。又動植物の宝庫として、鳥類や蝶類の多種多様、山地特有の風味ある山菜等で、行楽に又身心の鍛錬に好適、宮津、舞鶴も近い。冬はスキーのメッカでもあります。現在この地方の産業としましては、マンガン・ニッケル等を採取する鉱業が盛んです。「戦友」の歌、「ここはお国の何百里」の作詞者で、当時京都で、小学校教師をして居た「真下飛泉」氏の郷里が近いのか、同氏の

なお、比の大江町は、日本の古史研究の上に一つの問題を残している「元伊勢」と称せられる地で、ここにも、内宮、外宮、天の岩戸の聖地が残されている。

大江山へ登る道は今一つ宮津線の丹後山田で加悦鉄道



株式会社 安井書店

代表取締役

安井金三郎

電話 二一〇七〇〇代

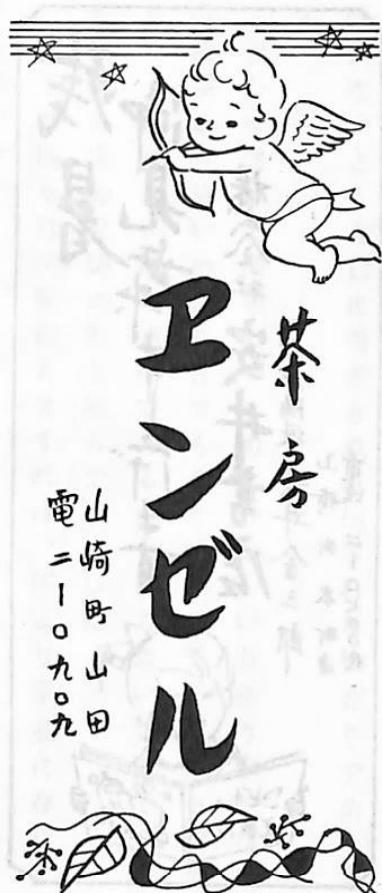
例年の春季見学会は、五月十日挙行。二台の観光バス

倉敷方面見学旅行

筆者の読んだ或る文献では、現在の「生野」は古往「死野」と呼んで居たのを、縁起が悪いので「生野」と改称するようになつたと謳るしている。つづく

大江山いくのの道は遠けれど  
まだふみも見ず天の橋立 (小式部内侍)  
この中の「いくの」の地が、現在の但馬の「生野」を指すのか、どうかはつきりしない。

この中の「いくの」の地が、現在の但馬の「生野」を指すのか、どうかはつきりしない。



# エングル

電  
ニ  
一  
〇  
九  
〇  
九  
〇  
九

で神姫バス停を出発したのが午前六時半であった。竜野より正条に出て国道二号線を西に走つて「倉敷市」着は、午前十時。おのの会員の希望によつて、美術館と民芸館に分れて入場、心ゆくばかり観賞した。倉敷市は、町中を川が流れ、その岸の柳と共に独特の倉庫造りは、黒瓦に白壁のガツチリした建物で、遺憾なく市の成立を物語つてゐる。倉敷から一時間半で「竹林寺山」に着、東洋一の天文台がある。詳細なる説明を聞き、天文専用の諸機械を見学、山を降りて保険局センターのある「遙照山」に至り、その大洋館で昼食、休憩、大舞台で余興ありて、歌謡曲、手品などに興じた。眺望よく、温泉ありて充分休息をとり、午後三時半帰途につく。途中「金光教本部」に参詣して岡山市に戻つたが、鳥城は時間切れで見学出来なかつた。午後七時半山崎帰着。

## 供出梵鐘の銘(二)

興国寺

叢林野令鐘斯資始且暮声文利益幽若  
昼夜鳴之警覺昏睡其功其德至広至大也  
所以宝坊者必先可有法器也雖然予泰安山  
従昔欠之予住山已束累仰未得也於是恩沢  
精舍之陀那同郡五十波村住有小林多兵衛秀明財賄充内

田園盛外委身五常帰心三  
宝一日來而問予曰承聞師年來有道鐘  
願是也否予答曰是也秀明曰我聞鐘者停止  
於幽尼法器也我今鑄之寄附當山專欲資薦  
亡父母春峯宗清信士華嶽慶春信女之冥福  
次為我並妻並子子法界含識等将来得果  
之因敢請許興予聞言而如飢得食如渴得水  
不勝歎喜踊躍之至即應其請秀明忻怡信  
受而鑄巨鐘一口掛在當山也夫実秀明者繞  
志於梁王或南唐後主之人也信心不可勝謂即作銘曰

絲竹管絃	亂耳動情	斯是捷稚	鐵石鑄成	
形体寂靜	隨和擊鳴	音声灑亮	驅睡魔清	透十方界
雷同碎司	幽止受苦	顛破無明	壁雖愚啞	猶又患盲
忽聞聞性	頓証不生			
正法山末流				
現住興國天台道識焉				

正徳二壬辰暦九月令辰

願主 同郡五十波村住

小林多兵衛秀明

治工 洛陽三条釜座和田信濃大掾藤原国次

晨覺無明長視梵

洪鐘功德 昏千生死海中船 義台道

有故今將絕其音 担徒信者殆慨嘆

普募淨財永欲為興國山門莊嚴而已

維時明治二十竈舍戊亥現住興國

哉笙巖焚香謹再誌

五月無緣會日再刻

(注) この鐘重量八十七貫

明源寺

經日

天下和順日月清明風雨以時災

屬不起國豐民安

明治十二年卯三月十一日造文

宍粟郡山崎町

明源寺十三世住職

堀江一法誌  
総門徒中

職工 姫路野里 保城忠平

(注) 他是寄進者人名三十數名あり、他に天人の浮彫、  
重量は七十四貫五百匁

妙勝寺

播州法光山妙勝寺當鑄梵鐘三回矣其一則岩野辺村某所捨  
貲而天和中羅災其二則十世日嚴造之而鐘有當分其声不協  
黃鐘以故十八世日淨自他戮力改鑄之而辺海有事供之於官  
宮造大砲以備之尔來晨昏不聞鐘声殆二十年今也四海靜謐  
梵鐘復古之秋歟

安政帝詔曰辺海無事之日復宜銷兵器以為鯨鐘鳴呼至仁之  
言有徵如此見住權少講義塚田日解広興四方信徒謀托浪華  
某工而新鑄之

以木 年三月三十一日成矣予適古浪華介本伝寺河井權大  
講義乞銘於予予雖不文皇恩之偏於民法運之未墜地如是盛  
舉宣不隨喜乎乃志因陋不敢辭也銘曰

世尊因行日 推鐘告四方

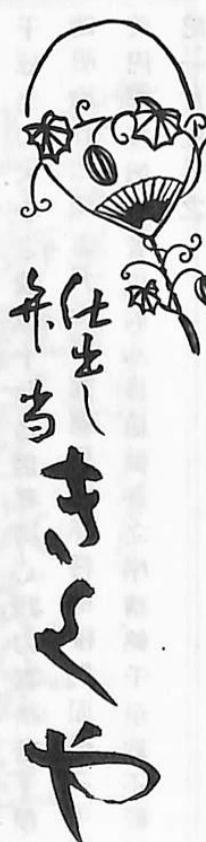
以求大乘法 獲法為法皇

鐘工緣亦大 經論舉不遑

朝聽醒煩惱 夕聞觀無常

聲聲法身說 法身無盡藏

何啻梵鐘響 大塵皆實相



山崎町戎神社南  
電話(2)一一九九九

書籍・文具  
週刊誌・諸紙

山崎町本町  
**志水成文堂**



(2)〇五四七

命乎嗚呼惜哉先代之功蹟到干此滅却矣幸有十三世勵道準  
東堂之在遺憾之余不顧勞苦自憤起而以謀鑄鐘再興之事於  
干茲當山大小之檀越十万之信者同心戮力喜捨若干淨財維  
時明治廿二年五月七日速鑄巨鐘亦將構樓門而掛之可謂二  
美円成復旧觀者也同八日總供養之序請銘千余敢不辭打伽  
陀一片勤焉之

明治十二年四月一日

本園寺嗣法心妙日修撰

播磨国宍粟郡山崎

法光山妙勝寺二十六嗣法

権少講義要妙院日解代

施主 妙勝寺檀方中

南無妙法蓮華經 大光山十六世小教正日修(花押)

治工 大阪高津在

今村久兵衛作

注 重量は九十五貫目であった。

恩 沢 寺

曩當山六世古同座元統先歸遺志所創造之梵鐘及宝樓者既  
經星霜久矣安政年間洋人渡航之際為海防蒙可矣官納之台

物之啓發莫先乎音声也音声之中又  
以鐘為先矣播陽青蓮寺固有大鐘以  
為仏事也久矣中古失響闕其用焉日  
遠深慨文乃唱之於諸檀那遂得銅鑄  
之資于爰明治十四年孟冬洪鐘再成  
矣於足手見聞之益備焉

銘曰

(以下氏名多數記入しあり、重量は七十四貫五百目)

華鯨铸造有來由殷々洪音響十州  
忽斷衆生煩惱夢曉天日暮幾春秋

喝

播磨国揖東郡網干

龍門寺住職

水野晦谷拝稿

明治廿二年五月中浣

当山現住 松下勵道謹書

青蓮寺

鎌鍔鍔槌 箕簾堂庭  
鑄乎其響 魁魅匿形  
巍然其象 賢聖顯靈  
衆務可作 净業可經  
法性將動 無明方醒  
要声遠振 万邦咸寧  
静明山八世日遠  
葵の紋  
南無妙法蓮華經  
蝶の紋

蓮華院殿尊靈華光院殿尊尼菩提  
大雲院殿尊位松平氏先祖代々菩提  
惣施主先祖代々一切諸精靈各菩提  
並家内安全 寺檀繁榮  
有縁無縁 法界万靈

鎌物師 姫路尾上久三郎  
職工 渡辺元治郎  
尾上 宇七

(註) この鐘の目方百拾九貫目

○一宮北中学に石碑建立

## 郷土だより

六月七日日本古城友の会大阪支部（代表者藤井重夫）一行二十五名は、山崎地方見学のため本会を訪問。当会幹事の案内で郷土館、本多城趾、閻齋神社、篠の丸公園、最上山、本多家墓所を見学。さつき展観賞の後林田町に向われた。

○ 古城友の会来  
○ さつき展

山陽興産株式会社  
地域開発に躍進する  
緑と太陽のある生活をあなたに！  
代表取締役 小川登  
本社 東鹿児修政会館  
大阪市北区富田町一  
三

一宮町三方老人会は、一宮北中学校々庭に元東大総長南原繁氏揮毫の「天祐自助」という碑石を建設。四月三日除幕式を行つた。碑は揖保川原より採取高さ四・二米巾一米の自然石

### ○ 歌集「歴程」出版

山崎町加生藤岡千代子さん（町會議員）は、B6版一三  
一頁の歌集「歴程」を刊行された。遠天叢書第一編で茜  
書房（神戸市）発行、総歌数二九八首。次は巻末の一首  
わが内の対話はらいて庭に出る春一番よあらあらと吹  
け

六月六、七、八日の三日間開催、下村記念館と隣りのサツキセンターは、連日見物客で大賑いであった。遠来の客も多く、山崎さつき展はいよいよ有名になつてゆく。当展覧会の入賞者は次のとおり

日本応用植物会長賞 一 田中 稔氏（鹿沢）  
樽岡定二氏（出水町）

山崎町長賞 一 谷林照一氏（鹿沢）

ライオンズ賞 一 田中 稔氏（鹿沢）

山崎町議長賞 一 春井優男氏（段）

神姫バス社長賞 一 光岡康秀氏（神谷）

神戸新聞社賞 一 尾崎 弘氏（鹿沢）

山崎観光協会長賞 一 山本義治氏（元山崎）

山崎商工会長賞 一 藤村博志氏（鹿沢）

○ 美術展・花木展その他

山崎町美術協会らはさつき展協賛をかねて、山中体育馆で美術展を開催し、写真、絵画、書道、彫刻、工芸など各部門多数の出品あり三日間盛会であつた。尚、同期間中日展日本画家野村東山作品展がフタギ二階展示室で開催、新作に特別出品の代表作をかえ大変に好評であつた。花木展も山崎フタギ店前広場で開催、各種盆栽、花卉、観葉植物など何百点を展示、即売して好評をえた。

○ 竜野美術展入賞者  
七月一日から七日迄開催された竜野市民会館落成記念美

術展の入賞者三十名のうち本郡から左の四人入賞された

市長賞 一 書道 濑畠 稔氏（寺町）

教委会长賞 一 書道 中川艶子氏（上牧谷）

美術協会会长賞 一 工芸 加藤一子氏（寺町）  
同 一 書道 伊野操治氏（庄能）

## 会員名簿 (28)

西川 修二	山 田 片山 純一	金 谷
高 井 信 雄	出 水 町 牧 野 しづ	
春 名 富 一	福 原 町 石 原 久 美 子	
森 元 才 助	出 水 町 松 本 すみゑ	
	川 戸	

